

懐かしい哀歌

牧師 山本 護

あるマニアックな音源を手に入れ、その中にあった『庭の木』という素朴な歌に心打たれて、自分でも口ずさみながら幾日かが経ちました。

庭園の夕暮れは どこまでも寂しくて
乱れ飛ぶ鳥たちも にわかになくなり
荒れ果てた景色には 昔日の影もなく
ぼつりぼつり見知らぬ家が わずかにあるばかり
あの頃ここに 暮らした人達は
一人去り また一人去り 誰も居なくなった
知らずにいるのだろう 庭の木は今もなお
春になればあの日と同じ 花を咲かせている

この歌には原詩があつて、唐の岑参の『山房春事』。

梁園日暮乱飛鴉 極目蕭条三兩家
庭樹不知人死儘 春來還發舊時花

日本語の歌で聴いてから、この七言絶句冒頭を見つめているとあら不思議、詩趣がいつそう濃厚になって、あたかも漢詩人のように哀感が深まるではないですか。

私はふいに廃屋を見つけるとしばし立ち止ります。たまにはクルマを降り、不法侵入にならない程度に踏み込むことも。そして「春になればあの日と同じ花を咲かせている」庭の木と挨拶を交わします。ロウバイ、サンシュユ、マンサク、ダンコウバイ、レンギョウ。どれもが黄色い花です。

「蕭条三兩家」。二軒か三軒の廃屋がある蕭条とした風景は妙に清らかで、永遠が予感させられます。キリスト者にとって「永遠」は重要ですが、これを信仰とか教えとかではなく、生きている自分の感覚を言葉にすれば「懐かしい」が近いかもしれません。

「白金の糸は絶たれ、黄金の鉢は砕ける。泉のほとりに壺は割れ、井戸車は砕けて落ちる。塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る。なんと空しいことか、とコヘレトは言う。すべては空しい、と(コヘレト 12:6~8)」。

コヘレトが語る「空しさ」は決して虚無ではありません。「霊は与え主である神に帰る」永遠を語りながらも、生きた人間の感傷による「庭樹不知人死儘 春來還發舊時花」のような懐かしい哀歌なのです。

『庭の木』をうたっているのは「ふちがみとふなと」という歌とウッドベースの二人組ユニット。作詞・作曲者は上野茂都という三味線弾きながら自作歌をうたう人です。Ω

